

# 高島藤樹会

(題字は、竹脇曇卿先生によるものです)

発行  
NPO法人 高島藤樹会

〒520-1224  
滋賀県高島市安曇川町上小川225-1  
藤樹書院・良知館内  
電話・FAX 0740(32)4156

## 「あかぎれ」を つづける

（公財）藤樹書院代表理事

淵田 豊朗



「遠く居て 母のあかぎれ 涙する  
藤樹かるたの『あかぎれこ  
葉』の読み札です。小さいころに聞  
いた藤樹先生の逸話で最も印象深  
かったものです。勉学のために故郷  
を離れた藤樹が、葉を母のためにと  
持ち帰ったところ、母は学びの道半  
ばだと叱って帰るようというとい  
うものです。そのあと、藤樹の母を思  
う気持ちとそれに対する母の厳しさ  
についての説明がありました。その  
とき、はるばる帰ってきた藤樹に母  
親はそうはしないだろうと思いまし  
た。その後、学校で歴史を学び、わ  
が子が成長し、仕事で多くの若い人  
たちと話をさせていた中で、藤  
樹の時代には、そのようなことが  
あっても不思議ではないと思いが  
ら、でもこの逸話は今も昔も母の心

の中はそうではないのだということ  
を考えさせようとする題材だと思  
うようになりました。高島藤樹会が作  
製した藤樹紙芝居には、そんな母の  
気持ちを書かれています。

あかぎれこ葉の逸話が実際に  
あったものかどうかはわかりませ  
んが、藤樹が著した『鑑草(かがみく  
さ)』の教子報(きょうしほう)に『孟  
子年たけて…(中略)…此のたてた  
る機を断るに異ならずと、甚だしく  
戒め給ひぬ。』(孟母断機(もうぼ  
だんき)の逸話)からきているのか  
もしれません。さらに、この話は、  
漢の劉向(りゅうきょう)の『列女  
伝(れつじょでん)』の中の「鄒孟  
軻母(そうもうかのぼは)」「の孟  
母三遷(もうぼさんせん)の後に  
出てきますし、「韓詩外伝(かんしが  
いでん)」にもあるそうで、それが  
原典なのか、誰が作ったのかもよく  
わからないようです。

孟母断機の逸話には孟子が学問の  
途中で、なぜ家に帰ってきたかがあ  
りませんが、「あかぎれこ葉」に  
は、藤樹が学問の途中ではるばる家  
に戻った理由があり、この話ではそ  
の方が重要であるように思います。  
藤樹かるたにもそれが強調されてい  
ます。

私は最近、八十六歳の母を亡くし  
ました。三・四年前までは自動車  
で出かけるのが好きだった母親に声  
かけて、琵琶湖を回ったり小浜や三

方五湖に連れ出したり、ボランティア  
で続けていた良知館の生花を買い  
に行ったりしていました。二年前に  
骨折して車いす生活になり出かけた  
と言わなくなりました。母が亡く  
なった今、親孝行がほとんどできな  
かったことを悔いる私自身に「出掛  
けたいと言っていた時にできるだけ  
のことは出来たかなあ」と言い聞  
かせています。

あかぎれこ葉の話は、母の子に  
対する厳しさや愛情と共に子が母に  
今できるだけのことをしておくこと  
の大切さが込められている逸話なの  
だと実感しています。さらに、人と  
の関わりでは、今やらなくても後で  
できる、いつでもできると考えては  
いけないということも含まれている  
と思います。

物事は、それを勉強すればするほ  
ど、その深さがわかってくるもので  
すが昨年度から藤樹書院に関わらせ  
ていただき、高島藤樹会にも入れて  
いただき、少し遅いのですが、これ  
から藤樹の学問の深さに触れられる  
ようにしたいと思っています。

「あかぎれこ葉」の話は、イン  
ターネットでなんでも注文でき、宅  
配便でどこへでも届けてくれる現代  
では、直接会って手渡しすること、  
直接会ってコミュニケーションする  
ことの大切さを伝える話になるのか  
もしれません。